

「演劇システムから学ぶ表現活動の 多様性理解演習」のための戯曲作品

才士 真司

岡山大学大学院教育学研究科「国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座」(以下、本講座)では、2019年8月30日、31日の二日間、岡山市民会館において、表題の演習を企画し、これを公益財団法人岡山市スポーツ・文化振興財団との共同事業とし、岡山大学生、岡山市民、岡山市関係者を対象に実施した。表題の演習を機能的に達成するため、本講座では、独自に戯曲を開発した。筆者による制作戯曲は、今後の継続、発展的運用が予定されているため、このオリジナル戯曲(抜粋)と戯曲の基礎設定を示すこととする。

Keywords：演劇，戯曲，文化施設，芸術文化資源

1. 演劇システムから学ぶ表現活動の多様性理解演習の狙いと目的

本講座では、「演劇システムから学ぶ表現活動の多様性理解演習」(以下、本演習)を、演劇表現とその運営、及び支援の必要に関する市民と学生の理解を深めるため、公益財団法人岡山市スポーツ・文化振興財団と共同で企画した。本演習の参加者は、本講座により募集された、岡山大学演劇部を中心とした岡山大学生と一般市民の合計、26名の演劇実践者と、岡山市スポーツ・文化振興財団により募集された「岡山市民会館見学会」に参加した約100名の岡山市民と岡山市関係者である。本演習は、2019年8月30日、31日の二日間、岡山市民会館大ホールで実施された。

本演習において演劇実践者のグループは、総合芸術としての演劇の構造と、劇場の機能を学ぶため、演出、技術、制作、演者の各グループに分かれ、その職責と実際のプロダクションを体験した。プロダクションパートの演習では、欧米の演劇制作、及びこれを応用した教育プログラムにおいても用いられる「テーブルワーク」¹など、作品や登場人物について、参加者が積極的に考察し、議論を重ね、理解を深める手法を多く活用した。集団・総合芸術である演劇の制作過程を、演出家による「指示型」ではなく、受講者自身が思考し、体験、観察することは、

より多様な価値観、個性を尊重する教育・表現プログラムであるといえる。この目的は演劇実践者が、参加者それぞれの個別の特性を認知し、意見の多様性の尊重が共同での芸術表現の制作において、重要な課題であることを理解することにある。このプログラムの詳細は、別添1及び2を参照いただきたい。

岡山市民会館見学会参加者と岡山市関係者においては、舞台制作の過程と教育プログラムの親和性を観察し、劇場のバックヤードの見学体験と合わせて、演劇実践者による舞台制作の現場を間近に観察し、これと交流することで、この理解を深め、岡山市が管理する文化施設の教育目的での活用に関する理解を促すものであった。

本演習の成果に関しては、主催者である公益財団法人岡山市スポーツ・文化振興財団により実施されたアンケートから高い評価を得ているが、より詳細な聞き取りと合わせ、今後に関する提言の制作が、本講座により行われているところである。

2. 戯曲制作の目的と背景

本演習では、古代吉備を舞台にしたオリジナル戯曲を制作した。使用戯曲をオリジナル作品としたのは、欧米における古代ギリシャ劇やシェイクスピア作品、近代劇作家の作品などを使用した演劇教育の目的が、言語、歴史、文学、芸術表現など多岐にわ

たることを考慮し、模範としたためである。

通常、戯曲を理解し、上演するためには、上に示した通り、他分野の学問領域に対する関心と情報が必要となる。また、戯曲の舞台化には演技に加え、衣装を含む美術、音楽、音響効果、照明設計などの表現手法と、それらに従事する異なる技術者集団をマネジメントすることが求められる。これらの要素によって演劇は、集団で行う「総合芸術」であると定義されるが、本講座では演劇が有する教育的機能のその多様な可能性に改めて着目し、これを学び、有効的に体験するために本演習を企画した。この際、機会を最大化するため、岡山の古代史への関心の向上と、岡山の地域資源である「温羅伝説」の活用の可能性を提示するため、これをモチーフにしたオリジナル戯曲を制作することとした。このことに加えて、岡山市民会館という舞台環境と設備を十二分に使用するため、身体表現としてのアクションシーンや、照明・音響効果の指定を意図的に行うためにも、本演習で使用する戯曲はオリジナルである必要があった。また、オリジナルでの戯曲制作は、岡山市、岡山大学独自のコンテンツとして、多様な運用の可能性を担保することにもなり、本講座では岡山市スポーツ・文化振興財団をはじめとする岡山市の各種団体と、このオリジナル戯曲制作のために構築された「物語設定」を基礎とした事業開発を継続する予定である。

3. 戯曲制作の意図としての桃太郎説話の解釈

本演習実施のために創作された「鬼備異聞」の物語は、誰もが知る童話である、「桃太郎」説話を原案としている。ここで本演習の主題ともなる古代吉備を物語の主題としての「桃太郎」説話に対する、筆者のアプローチを記す。「桃太郎」の説話は、日本各地に様々な類型を持つ、昔話やお伽噺などの民間伝承をその下敷きとしている。その原典は室町期に成立した大和朝廷による吉備征討譚に由来するという説が有力である。しかし、現在のような、犬、猿、雉子を従えた少年が戦装束で鬼退治に向かうというスタイルが定着したのは明治になってのことであって、1887（明治20）年に文部省編纂の国定教科書『尋常小学読本（巻一）』に採用され、このスタイルが広く普及したためである。これは、「富国強兵」をスローガンとする明治政府による、国民の戦意高揚を図った政策の一環であった。

作家の池澤夏樹は、「日本人の（略）心性を最もよく表現している物語は何か。ほくはそれは『桃太郎』だと思う。あれは一方的な征伐の話だ。鬼は最初から鬼と規定されているのであって、桃太郎一族

に害をなしたわけではない。しかも桃太郎と一緒に行くのは友人でも同志でもなくて、黍団子というあやしげな給料で雇われた傭兵なのだ。更に言えば、彼らはすべて士官である桃太郎よりも劣る人間以下の兵卒として（略）、動物という限定的な身分を与えられている。彼らは鬼ヶ島を攻撃し、征服し、略奪して戻る。この話には侵略戦争の思想以外のものは何もない」²と指摘したが、この背景には前述した「桃太郎」説話の軍国教育への利用がある。

桃太郎が国定教科書に掲載された当初は、育ての親への「孝行」の精神や、口語体での記載による新しい日本語としての「標準語」を広めようとした意図がうかがえる。しかし、1890年の『教育勅語』の発布は、桃太郎を「富国強兵」を掲げる「皇国」の英雄に祀りあげた。1894年の「日本昔噺」³の「桃太郎」での鬼に関する記述は、「我皇神の皇化に従はず、却て此の芦原の国に寇を為し、蒼生を取り喰ひ、宝物を奪ひ取る、世にも憎くき奴」とある。この表現は更に深化し、大正期の双六「鬼ガ島殖民地」では、西洋人と思しき鬼が使用人として描かれた⁴。アメリカの歴史学者、ジョン・W・ダワーは、太平洋戦争における日米双方のプロバガンダについて分析した著書『容赦なき戦争（War without Mercy: Race and Power in the Pacific War）』⁵のなかで、戦時体制中の日本での人種に対する偏見が形成される認識の枠組みを、「桃太郎パラダイム」と名付けた。

筆者が創作した「鬼備異聞」の物語では、桃太郎伝説の根幹を成す鬼退治を、「鬼」と呼ばれた吉備側からの視点に立ち、ここに創作を加え、紀元前90年前後のヤマト王権の吉備侵略戦争を物語の主題として描いた。

本作は、歴史、文学、及び思想的な主題を組み込みながら、独自の世界観を構築し、半島及び大陸からの渡来人や先住民族を含む人間と神々や妖異との攻防を物語とした。これらの要素により、上質なハイファンタジー作品として成立させ、多くの世代に受け入れられる物語性を展開させることを試みた。また、将来の二次・三次利用を想定し、シリーズ全体では100～200のキャラクターと、それを超えるアイテムの構築が可能となるよう設計した。

4. 戯曲制作の骨子となる世界観と物語・「鬼備異聞『地天の姫・黥面の王』編」のアウトライン

(1) 概要

作：才士真司

タイトル：鬼備異聞地天の姫・黥面の王編

時代設定：BC90年前後頃・武具や農機具が銅から鉄へと移行する時代

(2) アウトライン

それは、先の時代に「吉備」と呼ばれることになる、まだ「定まらぬ国」での物語。

かつて、その地のほとんどは荒れ野であった。岩と礫とだけがどこまでも続く、未開の地で、人は飢え、病に弱く、子どもたちの命は短く、腕も足も細く、その頬は痩け、唇は薄かった。ただ、人がいつの頃からか「ニイヤマ（新山）」と呼ぶ、その山の周囲だけは違った。ニイヤマとそれに連なる山々とその裾野には豊かな森が広がっていた。人は実りを求め、森を囲むように里を作った。だが、ニイヤマを囲む森は、「恐ろしい森」であった。ニイヤマには巨大な獣たちが遙か昔から暮らし、山や森に入る人を見つけては容赦無く、その牙や爪の餌食とした。しかし、それでもこの地で人が生きる為には、森に頼らなければならない。人々にとって、森から流れ出る川と木々の実りが救いだった。だから人は、どんな犠牲を払っても、森に入り続け、獣と争い、逃げ惑った。

一方、その頃の畿内地方に、大王を名乗る一族が、その強大な軍事力と呪術力で近隣諸国への侵略を始め、勢力図を拡大していた。だがまだ、この「ヤマト」という王権は、西の地の荒れ野に関心はなかった。

それからしばらく後のこと。ニイヤマの裾野に、荒れ野でもっとも大きな里ができた。里人は巨大化した獣を“神”と畏れ敬い、ある契約を結ぶことで里を維持する。里人は、山と森の恵みを頼ることに許しを神々から得る代わりに、春と秋の二度の満月の夜、生贄として里の子どもたちを七人、差し出した。この七つの命を、山頂の大岩に縛り、それと引き換えに、里人たちは、春と秋の満月と満月の間、裾野の森に入ることを許された。

ある年の夏、里で流行病が起こり、多くの子どもや年寄りが倒れた。里の巫女の阿曾^{あそ}は意を決し、山の奥深くに入り、獣を束ねる大口真神^{おおくちのまかみ}、大猿^{おおましら}、鳳^{おおとり}に、次の生贄となる呪印を受けることを条件に、希少な薬草を手に入れる。阿曾の持ち帰った薬草により里は救われたが、阿曾の呪印は日に日に大きく色濃くなり、里人を悲しませた。

ある夕暮れ、遠く海の彼方の言葉を使う若者、温羅^{うら}が里に現れた。その姿は黥面^{えいめん}で、額のそれは角のようであり、腕にも炎が走ったかのような刺青があった。眼光は鋭く、隆隆たる体軀は里の男たちより一回りは大きかった。里人は異形の若者を本能で恐れた。子や女は石飛礫を投げつけ、男たちは手に獲物を持ち、弓矢を構えた。子どもの投げた石が、温羅の額を傷つけ、その赤い血を見たとき、里人は

目の前の異形の若者を殺せることを意識した。だがその時、里から全ての音が消えた。風が止み、川のせせらぎも消え入り、蟲の音も聞こえなくなった。大気の揺らぎが消え、足の裏に触れる土の熱がにわかに上がり、その場に居合わせた者のすべてが息苦しさを覚えた。そしてそれが、目の前の異形の若者の仕業だと確信したとき、怯え、震えた。ある者は手にした得物を落とし、ある者は番えた弓を引き絞った。そのとき、阿曾が温羅の前に立った。この異形の若者と里の巫女の出会いが、すべての始まりとなった。温羅は阿曾の運命を知り、その武と呪術の力でニイヤマの獣ノ神を、山の頂の大岩に封じる。温羅の使う呪術は『種^{しゅ}』といい、「世界を構成する物質を操る術」であった。温羅は種を駆使し、西の地の気脈を整えた。ニイヤマとその周囲に集中していた大地の実りを荒れ地に巡らせ、鉄を精錬する技を伝え、鉄器を量産させた。こうして温羅と阿曾たちは豊かな国・吉備を手に入れた。温羅は阿曾と結ばれ、玉串という娘にも恵まれた。いつしか人々は、温羅を『吉備の冠者』と呼ぶようになった。しかし、そんな吉備の豊かさと、玉串の美しさに惹かれる者が、東に現れた。ヤマトの大王・御肇^{みはつ}國天皇^{くにつみこと}は、温羅の治世十四年の春、四道將軍・彦五十狹芹彦命^{ひこいさせりびこのみこと}（吉備津彦）を総大将とした吉備征討軍を送る。こうして吉備は戦火の渦に吞まれていく。

温羅は種の呪力^{ひひしやうじやう}と鉄器、主人である獣神の支配を失った狼や狒々^{ひび}、狸々^{しやうじやう}、森の獣を使役し、ニイヤマを城塞化。吉備やヤマトに恨みを抱く各地から集まった戦士たちは、温羅の鍛えた武具を身に付け、ニイヤマの城に立て籠もった。この時、吉備の各里に残された女、子ども、老いた者、そして要となる呪術者たちは、ニイヤマの裏側の谷や森の深くに入り、それぞれ身を隠す。これは温羅の命令であった。

吉備軍とヤマト軍の戦いは、武力戦、呪術戦共に熾烈を極めたが、戦いの最中、温羅と同じく、渡来人である桃李^{とうり}という若者が城にやって来た。桃李はヤマトの術者ではあったが、奴隸身分であった。同じ渡来人が吉備の首領だと知り、脱走。自由を求め、温羅を頼った。最初、桃李を近づけなかった温羅も、長引く戦の中、その呪術、武術の腕前を示し、兵をまとめる桃李を認め、玉串もまた、桃李に恋心を寄せるようになる。しかし桃李は、吉備津彦が送り込んだ密偵であり、吉備軍は桃李の調略により内部崩壊していくことになる。

(3) 『鬼備異聞 地天の姫・黥面の王』のアウトラインから派生したオリジナル戯曲

本演習に使用したオリジナル戯曲は、『鬼備異聞

地天の姫・黥面の王』の外伝となる。ヤマトの放った密偵が、温羅の陣に潜入する桃李と呼応し、ニイヤマの森に散り、城の周囲に結界を張る吉備の各里の力ある呪術者たちを抹殺する事件を描きながら、この闘争に翻弄される、歴史に残す名も無い少女たちを主人公とした。

5. 「演劇システムを通じて学ぶ表現活動の多様性 理解演習」用戯曲『鬼備異聞外伝・No Name Girl』（抜粋）

(1) 概要

作：才士真司

タイトル：鬼備異聞外伝・No Name Girl

時代設定：鬼備異聞 地天の姫・黥面の王と同様

登場人物

アヨ（女）	兄と恋人を戦に送り出した里の娘。
シドリ（女）	アヨとオヌを妹のように加護する里長の娘。アヨの兄で里一番の戦士であるタラを慕う。
オヌ（女）	アヨの妹。里の呪術者、吉備の大巫女の一人、ナシメの元で修行中。
シナヤバ（女）	蝦夷の薬師で呪術者。ヤマトの工作兵。
ククチ（男）	アヨに思いを寄せる里の若者。ヤマトとの戦に戦士として温羅の陣に参加していた。
カンラ	里の戦士。剣技ではタラを超える。アヨの恋人。

(2) 本編

序幕・謡

たとえば人が《世界》と呼ぶもの。
あるいは、《宇宙》、《自然》。もしくは《己》。
人はそれらの《理》を追い求めてきた。
理解し、使役し、支配したいと思った。
現在、人はその技を《科学》と呼ぶ。
かつては《呪術》と呼んでいたものだ。
人は世界を理解しようとした。
ある者はそれを《陰と陽》で、ある国では《木火土金水》で現し、ある時代ではただ、《神》と呼んだ。
そして、神に反逆する者を《鬼》と呼ぶ。

第一幕・ニイヤマ・裾野の森・城の裏側

アヨがやって来る。

アヨ「（辺りを探り）…シドリ」

シンと静まる森の中。

アヨ、周囲を伺いながら、

アヨ「シドリっ」

アヨ、応えを待つ。

アヨ「…シドリーッ！」

シドリの声「アヨ」

アヨ、声に顔を向ける。シドリが駆けて来た。

アヨ「シドリ」

シドリ「アヨ」

シドリ、アヨに駆け寄る。

アヨ「良かった。私が遅れたから」

シドリ「違う。こっちも手間取ったの」

アヨ「心配した」

シドリ「ごめん」

シドリ、辺りを警戒する。

アヨ、シドリの手を取る。

シドリ「もう、ここまでにしよう。…行こう」

アヨ「南ノ谷で花が枯れ始めてる」

シドリ「…東の森もだよ」

アヨ「地面が熱い。風も乱れて、匂いもきつくなっている」

シドリ「見慣れない足運びをする足跡があったから、

ヤマトの間者が入り込んでると思う。だから」

アヨ「獣たちの足跡が城に向かってた。始まるよ」

シドリ「うん。だから急いで戻らなきゃ」

アヨ「勝てるかな」

シドリ「勝つよ。ウラ様は無敵だ」

アヨ「でも、城の様子も分からない」

シドリ「だから、私たちはナシメ様のそばにいなきゃいけない」

アヨ「ナシメ様も分からないって言ってたじゃない。

見えにくくなったって。ウラ様の声も届かないって」

シドリ「でももう、分かったでしょ。この森の異変をナシメ様に伝えよう。これが、きっと最後の戦いだよ。ウラ様がそれに備えてるんだ」

アヨ「だから私も城に行きたい」

シドリ「そればダメ…帰ろう」

アヨ「鳥や獣、森も、山だって戦うんだ」

シドリ「飛べないし牙も爪も角もない。…あたし達

には。あたし達は人間だから」

アヨ「短剣がある。ウラ様が作ってくれた、この短

剣が」

シドリ「私たちはこれを戦うためには使わない。私たちは女で大巫女の守り人だ。それが掟だよ」

アヨ「（深呼吸）わかってる」

シドリ「アヨ…、大丈夫だよ。あんたの兄様、それ

に、」

アヨ「…」

シドリ「カンラも。絶対。誰も死なない。ナシメ様もそう、教えてくれたじゃないか」

アヨ「(俯く)」

シドリ「みんな大丈夫。ウラ様がいるんだ。あんな侵略者どもに負けるはずない。だから、待ってなきゃ。ちゃんと、みんなが帰ってこれるように、待ってなきゃ」

アヨ、頷く。

アヨ・シドリ「！」

アヨとシドリ、同じ方向を警戒する。小刀を抜く。

アヨ「…シドリ、ごめん。私が大声を出したから」

シドリ「アヨのせいじゃない。走るよ」

駆け出そうとするアヨとシドリ。

男の声「待ってくれ、アヨだろ？それにシドリ」

男が来る。

シドリ「…ククチ」

ククチ「よかった。森の中でお前らに本気で走られちゃ追い付けないからな」

シドリ「なんで、こんなところに」

ククチ「それは俺が聞きたいよ」

シドリ「…ナシメ様の言いつけで森の様子を調べている」

アヨ「ククチ」

ククチ「アヨ。…元気だったか？」

アヨ「城は？」

ククチ「…城。(咳払い) 城はもちろん、大丈夫だ。それでアヨ、元気だったか？」

シドリ「備えは万全なのか？始まるんだろ。大きな戦いが」

ククチ「大丈夫だよ。本当だよ。で、アヨ、元気だった？」

アヨ「カンラは？」

ククチ「あいつ。は、」

シドリ「…何かあったの？」

ククチ「いやいや。元気だよ。相変わらずだよ。…戦場、駆け回ってさあ、トウリ様について。大活躍だよ。俺と違って…で、アヨ、元気…」

アヨ、安堵の表情。

ククチ「アヨ…よかったな」

シドリ「もう、諦めようよ」

ククチ「何を」

シドリ「お前はカンラとの勝負に負けたろ。潔くない」

ククチ「うるさい。それでもなあ」

シドリ「なんで城を離れたんだ」

ククチ「…ナシメ様に渡すものを、ウラ様から預かっ

てきた」

女が現れ、三人の様子を伺う。

シドリ「…どうして、いつもみたいに鳥を使わない」
ククチ「いや、お前らだって分かってるだろ。森に敵が入り込んでいる。鳥や獣には託せるようなものじゃないんだ」

シドリ「何を渡すんだ？」

ククチ「それは言えない」

シドリ「どうして？」

ククチ「中身は、詳しく知らないから」

シドリ「はあ？お前、それおかしくないか？」

ククチ「おかしくても、こっちにもいろいろあるんだよ」

アヨ「(女に気づき) シドリ」

シドリ、女を見る。アヨを庇うように立つ。

シドリ「なんだ、お前は」

女「…無礼な奴だな」

シドリ「何？(と、短剣を構える)」

女「俺がナシメ様に渡すものを預かってる。そいつは案内役だ」

ククチ「紹介するよ。こいつはシナヤバ。トウリ様のところの戦士だ」

シドリ「…戦士？」

ククチ「ああ、そうさ。強いんだから」

シドリ「…見たところ、女に見えるんだが」

シナヤバ「…女だよ。女じゃ悪いか」

シドリ「いや。ここいらの里じゃ、女が城に入るとか、戦士になるとか、そういうのは禁じられてるからね」

シナヤバ「知らないのか。城にも女はいるぞ。ただし、戦さ場で役に立つ女。だけどな」

シドリ「…あたしたちには、大事な役目がある」

シナヤバ「承知してる。吉備の要の大巫女。ナシメ様の守り人なんだろ？お前ら」

シドリ「そうだ」

シナヤバ「仔ウサギみたいに、ガタガタ震えて、ずーっと隠れるのも大変だ。男どもに戦いを任せて。あっ、俺は戦ってるがな」

アヨ「私は、」

シドリ「(アヨの腕を取る)シナヤバって、ここらじゃ聞かない名前だね。北の人かい？」

シナヤバ「…そう。ずーっと、北になるね」

シドリ「北の人がこんな、西の戦争になんて関わるんだい」

シナヤバ「別に珍しいわけじゃないだろ。城には南の海の民だって。それに、ウラ様もトウリだって、元は海の果てから来たよそ者だ。ただみんな、ヤマトが憎い。それだけさ」

シドリ「奴婢^{めひ}だからか？」
シナヤバ「今は違う…よく分かったな」
シドリ「トウリ様と一緒に、何人かの奴婢がヤマトの陣から逃げてきたと聞いていたんでね。北からは遠いだろ。ここは」
シナヤバ「遠いね」
シドリ「ならどうして戦う。せっかくに逃げられたのに。相手はヤマトの大王だぞ」
ククチ「もういいだろシドリ。なんでそんな喧嘩腰なんだ。シナヤバもだよ。シドリ、アヨ。シナヤバは弓の名人で戦士なんだ。それに北の民に伝わる薬師の術もすごいんだ。俺だって、助けられた。トウリ様にも信頼されている」
シドリ「…」
ククチ「(シナヤバに) こいつら役目柄、警戒してるだけだからさ」
シナヤバ「いいよー。俺はどこでだって日陰者だった。そして、偉ぶる奴ってのはどこでだってこうだ。己は名乗りもせず、なにも明かさない。ただ、人と己の違いを見つけては、決めつけ、区別する」
アヨ「…いえ、確かに、失礼です」
シドリ「アヨ」
アヨ「それに戦士であるなら。ヤマトと一緒に戦う仲間なら、なおさらそう思います」
シドリ「…わかったよ、アヨ。…シナヤバ殿、非礼を許してください。私は里を治めるイヌカの娘、シドリ。こちらは里一の戦士、タラの妹、アヨです」
シナヤバ「あのイヌカ殿の娘か…こちらこそ失礼した。(アヨに) タラ様も息災ですのでご安心を」
アヨ「…ありがとう、ございます。あの、」
シナヤバ「なんだい？」
アヨ「どうして女の身で、戦士なのですか？」
シナヤバ「事情があれば、戦わないか？」
アヨ「…私は、」
シナヤバ「戦わねば、誰かが死ぬ。それは自分かもしれない。それでも戦わないか？」
アヨ「…」
シドリ「それでシナヤバ殿、ウラ様の伝言とはどのようなことなのでしょう」
シナヤバ「ナシメ様は今、どちらにいらっしゃるか？」
シドリとアヨ、顔を合わせる。
シナヤバ「案内してもらいたい。伝言も預かっている。だから直接、渡す」
シドリ「なら、先に伝言の内容だけでも承りたい」
シナヤバ「それはできない」
シドリ「どうして？」
シナヤバ「託された品も伝言も、ナシメ様にだけ伝

える」
シドリ「二人きりにはできない」
シナヤバ「立ち会われるのは構わない」
ククチ「ちょっと」
ククチ、シナヤバを引いていく。
シナヤバ「なんだ？」
ククチ「そんな話、聞いてないぞ。ナシメ様に会って何をするんだ」
シナヤバ「説得の説得だ」
ククチ「…えっ？」
シナヤバ「説得してもらえるように、説得する」
ククチ「説得だけ？」
シナヤバ「そう。ナシメ様とやらから話せば、ウラもわかるだろ」
ククチ「ナシメ様の前に座れば、全部、バレるぞ」
シナヤバ「なら、話が早くなるだけだ。…信用しろ」
ククチ「…」
シナヤバ「(アヨを一瞥) 確かにいい女だな」
ククチ「じゃろ。気持ちも優しい、いいやつなんだ」
シナヤバ「なら、なおのことだ。二人で止めよう。これから起こることは、戦でさえない。…あれは勝者のなぶり殺しだった。止めなきゃならない」
ククチ「止められるのか」
シナヤバ「トウリはそのつもりだ。だから、俺を連れて行け」
ククチ「…」
シドリ「ククチ」
ククチ、アヨとシドリを交互に見る。
ククチ「大丈夫だよ。シナヤバはいい奴だ」
シドリ「…そんなこと言われたって、お前だって、ものの中身は知らない。伝言の中身も…」
シナヤバ「ここで無駄な時間を過ごしてもいい。なんなら、城に使いでも出せ」
シドリ「…」
ククチ「俺はシナヤバを信頼している。お前らも俺を信じて承知してくれ。とにかく、シナヤバをナシメ様に会わせないと、どうにもならない」
シドリ「でも、私たちもナシメ様をお世話し、守る役割がある」
シナヤバ「ウラ様が大きな術を使おうとしている。それは、とても危険な術だ。これ以上は言えない」
ククチ「お前らだって分かってるだろ。戦が始まるんだ」
アヨ「戦いに関係することなの？」
ククチ「こんな時に、他に何があるってんだよ。頼むよ」
アヨ、シドリの腕を掴む。
シドリ、アヨを一瞥。ククチとシナヤバを見て

頷く。

ククチ「ありがとう。今日はどこにいるんだ」

シドリ「ウラ様の言いつけ通り、三日おきに移動している。…案内する」

ククチ「ありがとう。よし、行こう」

暗転。

第二幕・第一場・裾野の森・西ノ谷の狭間

ククチが座っている。その前に食事が用意されている。

ククチ「(膳を見つめている)」

ククチ、立ち上がって、奥に行こうとする。

アヨの妹で巫女のオヌ、来る。

オヌ「…ククチ」

ククチ「オヌ。もう、始まったか。シナヤバは？」

オヌ「ナシメ様はまず、シドリとアヨの報告を聞いている」

ククチ「そうか。まだ、会ってないのか」

オヌ「…食べないのか？お腹、減ったでしょ？」

ククチ「んっ…その、なんか」

オヌ「具合でも悪いの？」

ククチ「いや、ちょっと疲れて」

オヌ「そうか。なあ、ククチ」

ククチ「なに？」

オヌ「ククチはヤマトの兵を殺したか？」

ククチ「そりゃ、戦争してるんだから…。なんで、そんなこと」

オヌ「ククチは虫も殺せなかった。優しいから。誰よりも。私にも…」

ククチ「そうだったかな。でも、もう昔のままじゃいられないから」

オヌ「そんなことをさせられているなら、可哀想だと思う」

ククチ「でも、あの頃の俺たちじゃ、誰も守れない。オヌだって、」

オヌ「…」

ククチ「オヌはどうして巫女になったんだ？」

オヌ「どうしてって？」

ククチ「巫女になるのは、アヨだと思った」

オヌ「姉様は向かない。気分屋だから」

ククチ「確かに。でも、オヌは薬師になると思ってた。草や花に詳しくったろ」

オヌ「そうかな」

ククチ「そうだよ。ほら、俺が崖から落ちて怪我したとき、『王の癒し手』って薬草でさ、俺の痛みを取ってくれたろ。一週間、毎日毎日。あっ、俺、戦さ場で矢に当たったんだよ」

オヌ「えっ？」

ククチ「あっ、もう大丈夫。でもな、あんどき俺、本当にオヌの顔が浮かんだんだ。オヌのこと思い出して、あの薬草のこと、思い出した」

オヌ「ククチ」

ククチ「そうしたら、シナヤバが助けてくれたんだ。オヌと同じ、王の癒し手を見つけてきてさ。顔は全然似てないけどな」

オヌ「そうだね…。そういう人なんだ。あの人は。だから、ククチは信用するんだ」

ククチ「シナヤバは…いいやつだよ」

オヌ「私はナシメ様に会ったから。私をより、大切な使命へと導いてくれた」

ククチ「そうか。ナシメ様はすごいな（奥の部屋を見る）」

オヌ、ククチが見る奥の部屋への視線をみて、オヌ「何か隠してる？」

ククチ「…何も（と、膳の前に座り、飯を掴み、頬張る）。うん。うまいなあ」

オヌ、奥の部屋へと向かう。

ククチ「オヌ！待って！」

オヌ「…」

ククチ「シナヤバは説得をするだけだから」

オヌ「説得？何を？」

ククチ「みんなで生きるための説得だ」

オヌ「それは、戦うことでしか得られない」

ククチ「そうじゃないことだってあるよ」

オヌ「…ククチ、あなたは何しに来たの？」

ククチ「俺は…」

オヌ「ククチ、本当のことを教えて。ナシメ様に何かあったら、この戦、負けるのよ。森の結界は解けて、ヤマトの兵が城を…」

ククチ「…（後退り）」

オヌ、奥へと駆け出す。

アヨ「オヌ！」

アヨとシドリがやってくる。シドリは傷つき、アヨの肩にすがっている。

オヌ「姉様」

ククチ「アヨ、シドリ…そんな」

オヌ「ククチ」

ククチ「(オヌに) 違う」

アヨ「ククチ、なんで裏切った！」

オヌ、ククチに掌を翳す。

ククチ、その場に膝をつく。息ができない。

オヌ「(シドリの手当てをしながら) 何があったの？ナシメ様は？」

シドリ「…ナシメ様とシナヤバが」

アヨ「戦ってる！」

オヌ、駆け出そうとする。アヨ、オヌを掴み、

止める。

ククチ「(息ができる) プハーツ、ハッハッハッ」

アヨ「行っちゃダメ! もう…」

ククチ「待って、待て!」

オヌ「ククチ!」

ククチ「聞いてない。戦うなんて、知らなかった!」

アヨ「あれは! ほんの一瞬のできごとだった」

シドリ「あの北の地の女は」

アヨ「あの、薬師で、戦士で、暗殺者の女は」

ククチ「チクショー」

アヨ「ヤマトの呪術師だった!」

シドリ「…あの、おぞましい女は、ウラ様から預かったものを見せたいと言った」

アヨ「伝言も伝えと、」

シドリ「側に行っていていいかと言った」

アヨ「ナシメ様はその時、」

シドリ「私たちを見たんだ」

アヨ「私たちを」

シドリ「あの時、」

アヨ「あの時、ナシメ様は気づいてた」

シドリ「でも、あっという間だった」

アヨ「あの女の耳打ちする言葉と小さな箱に入った炎がナシメ様に絡みついた」

シドリ「ナシメ様はすぐにそれが、呪いの言葉だとわかった。あの女の目には邪悪な闇が宿っていたから」

アヨ「そして炎は言葉に燃え移った」

シドリ「ナシメ様は首に下げていた猪の牙を、あの女に振り落とした」

アヨ「女は、あの青い猪の強い牙を、掌で受け止めた」

シドリ「女は叫んだ」

ククチ「うわー、俺は、俺は!」

シドリ「その隙をついてナシメ様は私たちを、部屋の外に」

アヨ「なのに、ナシメ様はもう、あの女の呪いの言葉に捕らわれていて、言葉がナシメ様に貼り付いて貼り付いて剥がれない。剥がせなかった…」

シドリ「だから、ナシメ様は、私たちに」

アヨ「笑ってた。やさしい、いつもの笑顔に向けてナシメ様は、」

オヌ「…生きなさい」

アヨ「そう、」

シドリ「私たちに」

アヨ「オヌ、あなたに言ったの」

シドリ「そして戸を閉めた」

オヌ「ナシメ様…ククチ、お前! なんでだ。なんで、裏切った」

ククチ「こんことに…こんなことになるなんて」

オヌ「私たちは、ナシメ様に名付けられた兄弟だ」

ククチ「そうだ。兄弟だ。だから聞いてくれ。里のみんなは助けると、そう約束してくれたんだ! 俺はアヨ、お前が好きなんじゃ。知っておったろ。でも、お前には、カンラがおる。誰もが認める戦士だ。俺なんか、敵わない。でもよー、アヨ。お前を死なせたくなかった」

アヨ、ククチを張り倒し、胸ぐらを掴む。

アヨ「私は、お前なんか、大嫌いだ!」

シドリ「ククチ、答えろ。どうして、私たちが死ぬんだ」

ククチ「吉備は、ヤマトに負ける!」

アヨ、首を横に振る。

ククチ「いや、分かっているだろ? 吉備がヤマトに敵う筈なんかないんだよ」

シドリ「そんなはず」

ククチ「お前たちは、ヤマトの軍団を見てないから、そんなことが言えるんだ。奴らこそ、鬼だ。ウラ様がどんなに強くたって、城がどんなに立派だって、ダメなんだ。だって、」

シドリ「だって、なんだ!」

ククチ「城の中は、もう裏切者でいっぱいなんだ!」

シドリ「…嘘だ!」

ククチ「みんな、生きたいんじゃない…でもなシドリ、お前の親父はもう死んだぞ!」

シドリ「えっ」

ククチ「ナシメ様は知った筈だ。里の巫女だからな。里人の命は全部、分かってらっしゃるよ! でもさ、そんなこと知れたら、みんな、ナシメ様の言うこと聞くか? ウラ様のこと、信じてられるか?」

シドリ「オヌ、お前は」

ククチ「知ってたさ。言わなかったんだ。黙ってたんだ」

オヌ「…」

ククチ「もう、俺たちは、吉備は終わり、グッ」

ククチ、苦しむ。

オヌがククチににじり寄る。

オヌ「ナシメ様は優しくった。私を救ってくれた」

シドリ「…オヌ、やめろ。ククチも、利用されてた。敵のことを聞かなきゃ。それに、」

オヌ「家族の誰も! (アヨを見て) 姉様にも分かってもらえなかった、私の苦しみを、ナシメ様は癒してくれた。風の道が見えること。雨の中に水の記憶が宿ること。土に触れるとたくさんの声がささやくこと。全部、分かってくれたの! 私を褒めてくれたの…でも、もう、」

バン! と、扉が壊れ、吹き飛ぶ音。

シナヤバが現れる。

シドリ「貴様」

シナヤバ「ほら。やっぱり偉ぶる」

ククチ「シナヤバ！」

シナヤバ「ありがとう。終わったよ」

シドリ、短剣を抜き、シナヤバに躍り掛かるが、

シナヤバは片手でシドリを捌く。

シナヤバ「そんな傷で何をする。さっき、その、ひっくり返ってる男が教えたろ？俺は、お前と違う。戦士だ」

シドリ、シナヤバの足元に跪く。

アヨ「シドリ！（と、短剣を抜く）」

シナヤバ「大人しくしている！せっかく、拾った命なんだ」

アヨ、オヌを見る。

アヨ「オヌ、お願い！」

シナヤバ「オヌ！吉備の大巫女、ナシメただ一人の弟子！いい力だ。そう、殺せ、その男を。その男を殺せば、この女とお前の姉は助けてやってもいいぞ」

シドリ「ククチは仲間じゃないのか？」

シナヤバ「仲間？笑わせるな。人の女に横恋慕した挙句、里を裏切るようなゲスだ。仲間など、御免被る。それに俺は強い者が大好きだからあ。そう、（アヨに）お前の男、カンラ、あれはいい男だなあ。お前みたいに、俺に、睨まれただけで、何もできない、仔ウサギのような女が好みとは、残念極まりないがな」

オヌ「ナシメ様をどうした？」

シナヤバ「分かってるだろ。うーん、ほら感じる。森に巡る、結界が一つ、消えた。しかも、一番強力なやつだ。これから、どんどん消えるぞ。ほら今、他の隠れ里でも巫女が死んだ。あと三人か。でもな、流石になあ、強かったぞ。骨が折れた。いや、腕一本、潰したわ。俺も焼け死ぬところだった。でも、俺が一番手柄だ」

オヌ「お前は…」

シナヤバ「いやあ、すごかった！俺の言葉は毒だ！死者の国の炎だ！なのにだ、あのバアさん。燃えながらも、扉の前を動かんのだ。その上、俺に仕掛けてきた。いや、恐れ入った。さすがあのウラがこの吉備の地の要を託した巫女だ。だがな、お前らを守るために背を向けたんだよ。甘いよなあ。ダメだよ、あれじゃ死ぬ」

オヌ、シナヤバに術をかける。

シナヤバ「なんだ、つまらない。俺を選ぶのか。その馬鹿な男を殺せば、使い物になるかと思ったのに」
オヌ「黙れ。ナシメ様はなあ。ナシメ様は…（喋れない）」

シナヤバ「おい、ククチ、起きろ。この二人を殺せ。オヌは俺が術で縛っている。なにもできん。そっちのお前の仔ウサギは、お前のいいようにしたらいい」

ククチ、立ち上がると、シドリが落とした短剣を拾う。

アヨ「ククチやめて！」

ククチ「…シドリ、オヌ、分かってくれ。— アヨ、お前も、いつか、分かる」

アヨ、ククチの前に立つ。

アヨ「…そんなの、分かるわけない」

ククチ「…アヨ、どいてくれ」

アヨ「守らなきゃ、いつかなんて、永遠にこない」

シナヤバ「いいねー、仔ウサギ。今、分かったろ。そうなんだよ。戦わなきゃいけない時は来るんだ！そして人は選ぶ。戦士となるか、死んで、ただの骸となるか！」

ククチ「アヨ、どけ！」

シナヤバ「アア、いいなあ。ここに全部、ある。人を思う気持ちの全部が。いとしさと憎しみの全部が。悲しいなあ」

アヨ「ククチ。それでいいの？ククチの名は、裏切り者ってことになるんだよ！」

シナヤバ「ククチ！戦が始まったら、もう止められん！吉備の民人は皆殺しだ！」

ククチ「！（オヌに向かう）」

アヨ、ククチを刺す。

ククチの腹に、アヨの短剣。

ククチ「…アヨ（ふらふらと場を離れ、少し歩き、しゃがみ込む）」

シナヤバ、逃げ出す。

飛び出してきた人影が電光石火にシナヤバを斬りつける。

シナヤバ、逃れ、消える。

アヨ「カンラ！」

カンラ、アヨに駆け寄り、抱き止める。

(3) この後の物語

本演習において使用した区分のみ、ここに示した。カンラは、ナシメの危機を察知したウラの指示でやってきている。カンラへのウラの指示には、ナシメが殺された場合は吉備を捨て、アヨたちと脱出することも含まれている。ククチはオヌの治療によって一命を取り留める。一同により、森を捨て、吉備を離れるかの議論が行われる。オヌを殺すため、シナヤバが機会をうかがっている。

6. おわりに

本講座と公益財団法人岡山市スポーツ・文化振興

財団による本演習の実施は、市民の高い関心を集め、定員を超える参加があった。現在、進めている本演習の検証作業を経て、本演習で行なったプログラムを定期的に開催することで、演劇制作の教育活用に対する関心を高めたいと考える。本演習で目標としたのは、我が国の商業演劇シーンにおいて、多くの場合採択されてきた、「演出家が考えたイメージ」を具体化するという制作手法とは異なる、スタッフ

全員で戯曲を読み込み、取材し、学び合い、個々の多様な価値観のもと、アイデアを出し合い、舞台作品を構築していく対話・探求的な手法による作品制作である。この、対話・探求的な手法による舞台制作の普及を図り、今後は地域での「市民参加演劇」の基盤を構築するプロジェクトとして、本演習の運用を検討していく。

注

- ¹ 台詞の背景やそこに込められた心情を俳優たちと細かく議論しながら掘り下げていく演劇ワークショップの一種。ビジネスシーンなどにも導入されている。
- ² 池澤夏樹「終わりと始まり『桃太郎と教科書 知的な反抗精神養って』」, 朝日新聞, 2014年12月2日.

- ³ 『少年世代』主筆の巖谷小波（1870年-1933年）の編纂
- ⁴ 雑誌『子供の友』新年号付録「桃太郎すご六」1917年1月1日.
- ⁵ ジョン・W・ダワー『容赦なき戦争』第9章「鬼のような他者」, 平凡社, 2001年12月10日, p.23-24.

別添 1

岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》提供

演劇システムから学ぶ表現活動の多様性理解演習

受講生募集要項

日程：8月30日・31日 会場：岡山市民会館大ホール

内容

古代吉備を舞台にしたオリジナル戯曲による演劇ワークショップを実施することで、演劇の多様な可能性を大学生が学び、体験する特別講座。

募集人数：岡山大学学生希望者 25名程度

演出部 / 若干名 制作部 / 4名 技術部(美術・照明・音響) / 6名 俳優部 / 10名程度

講師

演出 / 才士真司 岡山大学准教授、クリエイティブディレクター、映像・舞台制作者
技術 / 佐々木紳 岡山大学非常勤講師、映像作家、音響効果技術者
制作 / 伊藤駿 岡山大学助教、企画プロデューサー

* 講師陣はいずれも東京のショービジネスシーンで活動

プログラム

参加者は演劇・劇場のシステムを学び、各部に分かれ実際のプロダクションを体験する

8月30日

1. 講義
 - 演劇を構成する要素としての「カンパニー」と各技術職
 - 劇場の機能
 - 稽古の進め方
2. 演習① 戯曲解釈(本読み・美打ち・テーブルワーク)
3. 演習② (各担当講師が指導)
 - (ア) 演出・演者班
 - (イ) 技術班
 - (ウ) 制作班

8月31日

1. 演習② (8月30日に準ずる・各担当講師が指導)
2. 演習③ 美打ち
3. 演習④ 通し

別添 2

演劇システムを通じて学ぶ表現活動の多様性理解演習

岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》

日程：8月30日・31日 会場：岡山市民会館大ホール

8/30版

day 1	h	区分	内容	担当	備考1	備考2
	13:00	集合				
	13:10	全体	オリエンテーション	石田・才士	劇場ツアー含む	
	13:45	全体	戯曲研究	才士・佐々木	1幕1場(1-1)分	
	14:30				休憩	
	14:40	全体	UP 1	伊藤・才士	柔軟	
	15:00	技術・制作	レクチャー	佐々木・才士		
		演出・演者	UP 2	キキ・伊藤	発声	
	15:20	全体	演出設計	才士・佐々木	1-1-A(シナヤバ登場まで)	
	16:00				休憩	
	16:10	技術・制作	美術・照明・音響設計	佐々木		
		演出・演者	立ち稽古	才士	1-1-A(シナヤバ登場まで)	
	17:00	全体	演出設計	才士・佐々木	1-1-B(残り)	
	17:40				休憩	
	18:00	技術・制作	美術・照明・音響設計	佐々木	1-1-B(残り)	18:15見学会ツアースタート
		演出・演者	立ち稽古	才士	1-1-B(残り)	
	18:50				休憩	18:55 - 19:40 見学会ツアー 劇場内
	19:00	全体	1場通し	才士・佐々木		
	20:30	全体	終了・撤収・退館			
day 2	h	区分	内容	担当	備考1	備考2
	10:00	全体	集合			
	10:10	全体	オリエンテーション	才士		
	10:20	全体	UP 1	伊藤・才士	柔軟	10:30 見学会ツアースタート
	10:40	演出・演者	UP 2	キキ・伊藤	発声	
		技術・制作	設営	佐々木・伊藤		
	11:00	全体	1場通し	才士・佐々木		
	11:30	全体	戯曲研究	才士・佐々木	1幕2場(1-2)分	11:25 - 12:20 見学会ツアーー行 劇場内
	12:15				休憩	
	13:00	技術・制作	レクチャー	佐々木・才士		
		演出・演者	UP 3	キキ・伊藤	柔軟・発声	
	13:30	全体	演出設計	才士・佐々木	1-2-A(シナヤバ登場まで)	
	14:10	技術・制作	美術・照明・音響設計	佐々木		
		演出・演者	立ち稽古	才士	1-2-A(シナヤバ登場まで)	
	15:00				休憩	14:55 - 15:50 見学会ツアーー行 劇場内
	15:10	全体	演出設計	才士・佐々木	1-2-B(残り)	
	15:50	技術・制作	美術・照明・音響設計	佐々木	1-2-B(残り)	
		演出・演者	立ち稽古	才士	1-2-B(残り)	
	16:40				休憩	
	17:00	全体	2場通し	才士・佐々木		
	17:45				休憩	
	18:00	技術・制作	レクチャー	佐々木・才士		
		演出・演者	UP 4	キキ・伊藤	柔軟・発声	
	18:15	全体	1場・2場通し	才士・佐々木		
	20:00	全体	講評	石田・才士・佐々木・伊藤	石田さん挨拶(20:30入り)	
	21:00	全体	終了・撤収・退館			21:15完全撤収